沖縄県立博物館紀要　第20号，　27－47，　1994

沖縄の産育儀礼における子どもの衣服と背守り

與那嶺一子、金城　武子
（沖縄県立博物館）

A Study on the Children's Clothes and Talisman worn on the back in the Customary Upbringing of Okinawan Children

Ichiko YONAMINE and Takeko KINJYO
(Okinawa prefectural Museum)

Abstract : The main purpose of this paper is to clarify the significance, roles, forms and changes of the children's clothes, especially Semamori (a Talisman worn on the back), as part of the custom of Okinawan child raising.

Semamori (Talisman worn on the back) in Okinawa and Amami districts are called "munnuki", "mabuu ushii", "mabuyaa uu", and divided into five types of forms.

The form of some of the Semamori were influenced by mainland Japan, but other semamori were original, found in only Okinawa and Amami districts.

Semamori is differentiated from Semon crests worn on the back in mainland Japan. Contrary to mainland, only the name of Semamori was used in Okinawa and Amami districts, and the Semon were considered to be a type of Semamori.

The custom of putting on ragged clothes (Boromatoi) and Semamori during childhood was continued until the Meiji Era.

In our opinion, the educational system and new trend toward, "clean is best", both influenced by the Meiji Government, made these customs decline.

はじめに

沖縄県立博物館には、次のような子どもの衣服が３領ある。着物の後衿下の背中心部分に糸でなんらかの文様を施したものである。（写真１，２，３）

写真1は、染分地に山波や鶴、松竹梅を染めた紅型の木綿の袷の子ども着である。衿は赤い裏を見せる返し衿で、衿下が短く、古い琉球の衣装形態をとどめている。背中には、背縫いを中心にして、縦に三筋の糸目が見られる。糸は撚りの強い赤紫の13本どりの絹糸で、それぞれ7針縫われており、上下から房が垂れている。

写真2は、昭和35年に着用された一つ身の女児の着物で、和装の袷の形をしている。背中には、2本取りの赤い糸で、縦に7針縫い、右に折れて4針縫う形の文様が施されている。

写真3も、写真2と同年代に着用された男児の一つ身の着物である。着物の形態は写真2と同様に和装の一重であり、背中には2本取りの青い糸で菱型の文様が縫いつけられている。また、紐の付け根にも同じ糸で同様の文様が縫われている。(写真4)

このような、糸で施された文様は「背守り」と呼ばれ、既にいくつかの報告がなされている。(文献1～6)写真1の背守りは沖縄独特の形であること、写真2の形は、日本本土で「背守り」として伝えられてきたものであること、写真3は日本本土で「背紋」と呼ばれていることなどが分かっている。しかし、このような形の違いは単なる時代的な変遷なのか、また沖縄の各地域によって背守りのとらえ方や形に違いはないかどうか等、まだ細かな部分で分析されていない点がいくつかあり、沖縄の産育における子どもの衣服との関わりを考えながら、いくつか背守りの事例を取り上げながら考察してみたい。

なお、分析にあたっては、実物資料の調査とともに、聞き取り調査も数例行ったが、これまでに報告された『沖縄民俗』(全5冊・昭和63年2月29日発行／第一書房)や各市町村史などの民俗調査結果を中心に参照した。(文献6～62)

写真1

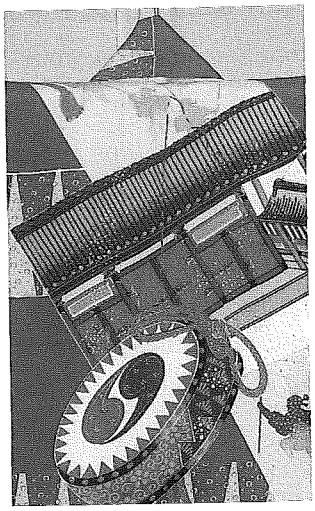

写真2

写真3

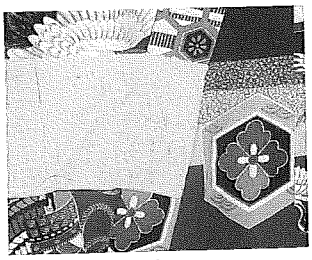

写真4

産育儀礼における子どもの衣服

沖縄や日本に限らず、世界各地に見られる子どもの衣服には、無病息災の祈りを込められた例が多く見られる。

中国の漢族では、刺繍などにより「五毒」(蛇、ひきがえる、むかで、さそり、やもり)の文様を子どもの衣服に施し縁起をかつぐ。また同サラ族は、様々な色の三角形の小裂を継ぎ合わせて百家衣と呼ばれる子どもの衣服を作ることで子どもの長寿を祈る。(文献51)

韓国の産育儀礼では、子どもが生まれてからの百日目の祝いには、百家からもらった百枚の小裂で作った衣服を着せる。小裂を接ぎ合わせることに子どもの長寿祈願と衣服に対する欲を減少させる意味がある。また、初誕生日に着せる衣服には黄青赤白黒の五色が使われ、五方帝王の保護が得られるという。この衣服に刺繍または金箔で施された文様が見られるが、五徳と五倫を守り五福をもたらすという由来がある。さらに、巾着の紐に下げられる斧・蝶等の銀細工には鬼神の接近を避ける意味が込められている。(文献22)

ラオスのメオ族でも、子どもや女性の背には四角の飾り布が見られるが、これには長寿や幸福を祈る意味がある。(*1)

では、わが国では、わが沖縄では、子どもの無病息災をどの様な形で衣服に込めたのだろうか。

無事に生育するための十分な霊力が備わらず、その身体から遊離しやすいと考えられていた子どもの魂を守り、あるいはその身代わりとなるものとして衣服は、重要な役割を担っていた。たとえば、新しい着物の衿を柱におしつけて「自分は強く、着物は弱く」といった意味合いの言葉を唱えてから子に着けさせるという習俗が沖縄各地に残っているのはその表れであろう。また、子どもの魂を守るものとして、沖縄では「マブヤーウー」、日本本土においては「背守り」「背紋」と呼ばれるものがあるが、これは、子どもの着物の後ろ衿下の位置によくみられたもので、糸や様々な形、色の裂を縫いつけることで、子どもを守ろうとする一種のお守りのようなものである。(詳細は次章以下)その他に、産着などの材質に母親の下着類を利用したり、嬰児にボロを纏わせることによって魔除けとするといったことも行われている。

ここでは、そういった沖縄の産育儀礼における子どもの衣服と衣服にまつわる禁忌習俗を各市町村史等の報告から産着を中心に簡単にまとめてみた。

まず、最初に生児が身につけるものだが、表1からも分かるように、圧倒的に多いのが「ボロ纏い」である。嬰児をくるむボロには、古着や母親の下着、ありあわせの布や古いバサー(芭蕉)などが使われる。この状態は、不浄であるとされる出産の忌みがあけるまで、あるいは子と母親の体調が安定してくるまでの期間、このままの状態が続く。その期

間は短いもので渡名喜の３日、座間味の４日、長いもので栗国の２ヶ月～３ヶ月の報告があるが、おおむねは１週間程度で、「マンサン」、「ナージキ」などの日には、袖を通して着る産着に変わる。南風原では「ボロ纏い」の理由を「チュラスガイシーネーンダンシン・ンジュンドー＝綺麗な格好をさせると普通は見ないものをみるようになるよ」と言われるからだとしている。奄美諸島などでも「悪神に子どもの誕生を知らせないためだ」と「ボロ纏い」を理由づけしている。このような事例からも、この「ボロ纏い」には新生児死亡率が高く、超自然的なものが人の生死に関わると信じられていた頃の魔除けとしての意味をまず一つにはみてとることができる。ボロ纏いではないが、誕生に際して、男女反対の性にまげて伝えたりする習俗も多く見られる。

産着は「ウフジン」「ハラスブィジン」（勝連町南風原）「ウブジン」（読谷村、他）「ナーチキジン」（大宜味村、他）「イーギングワー」（東風平町、他）「ナージキジン」（玉城村、他）「ウマリグンマー」（栗国村、他）等と呼ばれ、形としては、だいたい一つ身で縫われているようである。大宜味村喜如嘉では「衽なし筒袖、衿下をのこして衿をつけ、腰紐は背中に着けて前で結べるようにする」といったものが使われていた。また、名護市久志、読谷村喜名、楚辺、糸満市などでは、子どもの衣服には、身ごろと衿、袖が異なった布や柄、色を用いるといった報告が見られる。こういった違う布や柄色を使って産着（あるいは子ども着）を作る例としては、前述の中国サラ族の「百家衣」や韓国の百日目の子ども服、また、日本でも長寿を迎えた人や健康な人の布裂をもらって着物を縫い、ご利益を得る「百徳」、「百徳テダマ」と呼ばれる子どもの衣服がある。（石川県／文献３）また、徳之島でも健康で長寿の女性の着物の切れ端を繋ぎ合わせて着物を縫う例がみられる。（文献５）

このように布を違えて衣服を仕立てる意味について、那覇市史（文献59）では「一反布から産着を作ると生まれた子の運勢が弱くなる」（真栄平オト談・明治25年生・首里汀良町）という報告がされていて、名護他の場合にも確認を行っていないが、同様の意味があり、先述の百家衣、百徳と関連があるのではないかと思われる。

産着を誕生前に用意するのを嫌う習俗は、全国的に見られるようだが、沖縄でもそれは同様で「産前に産着を縫うものではない」といって準備をしなかったとの報告が多数みられる。この習俗は、今帰仁村の報告によると昭和の初め頃に見られなくなったとある。他の地域の報告をみても、明治から昭和にかけて、この習俗の伝承は曖昧になってきている。また、「ボロ纏い」に使われる布も古着や母親の下着、ありあわせの布や古いバサー（芭蕉）などが使われていたが、次第に新しい布を使うようになる。

「ボロ纏い」や「産着」に関する習俗の変化は、この時期普及する学校教育(*2)などによる新しい考え方や社会的風潮によって、魔除の意味合いや子どもの無病息災を願うものか

ら、新しいもの、より清潔なものへとへと変化したことの表れではないだろうか。

表1）沖縄における子どもの産着

地　域	産着以前	産着名称	産着の形／色／材質	産着用意	産着着衣時期	出典No.
国頭村	フクター（ボロ）			親兄弟がマンサンに用意	マンサン	文献8
大宜味村（喜如嘉）	カホーギン（着古した着物・ボロ布）	ナーチキジン	晒の一つ身。衽はなく、筒袖、衿下を残して衿を付ける。腰紐を背中に付けて、前で結ぶ。	産後に用意	マンサン（6日目）	文献9
東村		イーギングヮー				文献10
今帰仁村	ありあわせの布	ウブジン		産後に親戚の女が用意		文献12
名護市	柔らかい布（ボロ）	ナージキジン・マンサンジン	衿、袖が身衣と柄あるいは色を異にする		ナージキ	文献14
伊是名村	古着・ボロ	ウイジン	白晒木綿で袖つき	産後に用意	マンサン（7日目）	文献15
石川市	フクター（おむつ）			産後に用意	初庚の日（豚見せの日）	文献17
与那城村（宮　城）	フクター（ボロ布）	クヌジヌ（子どもの着物の総称ウブジン	那覇から買ってきた白晒	産後に用意		文献19
勝連町（南風原）	木綿のフクター（古着）	ウフジン・ハラスブィジン ウブジン	新しい木綿の着物・母親の着物	産後に用意	1週間目	文献18
読谷村（座喜味）		ウブジン				文献21
（儀　間）	木綿のフクター（冬） バサー（夏）					文献22
（喜　名）	古着物・バサージン		一つ身のチングヮー。衿や袖は身頃と違う布を使った。(3～5種類)		1～2ヶ月後？	文献23
（楚　辺）	木綿やフクター（冬） バサー（夏）		晒・古着。衿、袖身ごろに異なった布を使用	出産前	ハチガニ（初庚の日）	文献24 文献25
（長　浜）	ミーカカン	ウブジン			男子は初庚、女子は2回目の庚の日	文献26
嘉手納町	芭蕉の古い着物、古い着物を寄せ集めて縫った物（クヮナシフクター）、さらし木綿を肌着風に縫った物を着せてクヮナシフクターでくるむ。ネルの様な柔らかい古着を縫いなおす			出産後	マンサン（6、7日目）	文献27
北谷町	バサー、フクター	ウブジン	二つ身、三つ身の着物で後の腹の部分に紐がついていて前で結ぶようになっている物で、母親のカカンを解いて白い着物を縫う。古着で作る		ボージナディー（男児：最初の庚 女児：2回目の庚、または初辛	文献61

地　域	産着以前	産着名称	産着の形／色／材質	産着用意	産着着衣時期	出典No.
中城村	古着、おしめ、バサー	ウブジン	新しいバサー、木綿ヂン	産後に用意	10日目	文献28
西原町	白い着物・ウブジン・下着（カカン）を解いて作る。 その辺りにある布。	ウブジン			ナージキー （7日目）	文献29 文献30
浦添市		ウブジン	晒の産着	出産後		文献31
那覇市	母親の着物		一つ身で脇下に結び紐をつけ色は自由	出産後に親戚や隣人が手伝って単を異にする布裂を集めて仕立てる	命名式	文献59
仲里村	フクター	ウブジン	柔らかい布		マンサン（9日目）	文献36
玉城村		ナージキジン	衿なし	産後に用意	ナージキ	文献35
知念村	親の古い着物		バサージングヮー		ナージキー	文献36
南風原町	袖なしの白い着物を着せて、その上から古着、ボロをまく。 ただボロをまく		袖、衿、身ごろを付けた着物		マンサンがすんでウヮーミシの日（男子は庚、女子は辛）	文献38
佐敷町		ウブジン				文献60
渡名喜村	メーチャーギン、ボロ布	クンニャーギン		出産後	産後3日目	文献62
座間味村	布・古着	ススマグィジン	裾を曲げた着物。女子は男の褌、男子は女子のズロースを使い着物を作る		4日目	文献39
粟国村	衿・袖のない一つ身	ウマリグンマー	木綿で衿なし、一つ身	産後に用意	2～3ヶ月	文献40
平良市	ボロ布					文献41
城辺町	母親の古着・ボロ布	ナーフィギン	一つ身、背の上方に二寸ほどの縫い込み		ナーフィ（命名）	文献42
上野村			スグンガマ（白い着物）		ソーズバリ：初外出（4日目）	文献43
石垣市		シラキン	白木綿で作られた母親のウフカカンを解いて作る			文献44
竹富町 （祖　納）	フクター（ボロ布）	シラキヌ		産後に用意	命名の日	文献45
与那国町	大人の着物を解いたもの	ウムンナニ	親の古着・白い産着		ドゥガヤガアギが終わるまで（4日）	*11

表２）通過儀礼における子どもの衣服

地　域	ハチアッチー（初外出）	タンカー（初誕生）	そ の 他	
国頭村			３才：一つ身→３～７才：三つ身→７才以上：四つ身	文献７
大宜味村	ハチアッチーの着物	タンカーボージギ（紐を両衿の表に付けた）	５～６才：三つ身→13才までには四つ身、 ビゲーギン：上から歯が生え始めた子供の厄払いの着物	文献９
本部町			４才まで：一つ身→８才頃まで：三つ身	文献13
伊是名村			５～７才：自家で織った芭蕉布で７人の手で織った着物（ウナザレージン）を８月12日の踊りを見る時につけた→ ７才：ナナフィザイジン（大人用の着物） 普段着：フクターの薄い物のチージン（単衣）、バサージン、アーシンジン（袷）、木綿。	文献15
伊平屋村			７才：７人で布の材料を作って織った着物（ナナヒザイ布）	文献16
読谷村（喜名）			３才まで：三つ身→７才：四つ身	文献23
（楚辺）			５才：三つ身→７才頃：四つ身	文献24 文献25
嘉手納町	夏はサワイジン（モスリン）の単衣冬はその上からチャンチャンコ	タンカージン（バサー・絣）：赤、黄、青の色染を黒く染めた地に綾を織なして入れた		文献27
勝連町			成長の遅い子にはミーハルチンを着せる	文献18
具志川市			正月：赤い大きな縦アヤー・イーチリー	文献20
西原町			両袖は共布を使い、身ごろの丈を継ぐ場合には継ぎ目は裾の近い方に入れる	文献29
浦添市			明治、大正：木綿や芭蕉布で織った大柄	文献31
那覇市	上流：紅型、庶民：絣で新調		７才（男子）：チュイジン（一人衣）	文献59
知念村			３才頃まで：一つ身→３～７才：三つ身→以後四つ身	文献36
佐敷町			５～６才まで：ユカタグワー（チングワー）という木綿に大柄の綾を入れた筒袖→５～６才：バサー。晴着：絣を買ってハウリグワーを作った。	文献60
南風原町			７才位になるとマブヤーウーはつけなくなった。	文献38
城辺町			３才：袷の着物に羽織のサラタティギン	文献42
石垣市			大人用の着物の残り布を二種類以上継足して縫う	文献44

背守りの役割りと形

子どもの衣服の背に、糸や布で文様を施した「背守り」には、どのような意味と役割が込められているのだろうか。

わが国では、幼児の魂は不安定で遊離しやすいと考えられている。特に背中は無防備で、「背の縫い目のない着物を着ると魔がさす」(文献53) と言われ、背縫いのない、いわゆる一つ身の着物の背中心部分に文様を施し、お守りの代わりとする習俗が残っている。背守りの長い糸には、長寿を祈願する意味と、魔物が糸ばかり引きぬいて子どもが助かるという魔除の意味がある。また、糸が房状になっているものや布裂を縫いつけた背守りには、子どもが井戸や囲炉裏に落ちた時に、それを神様が引っ張って助けるなどの伝承がある。(文献1, 2, 3, 4, 53, 54, 55)

日本本土における背守りの実例をよく見ると、

①糸で直線に糸目を見せるもの (図1)

②糸で房のみを作ったり、菱型等の文様を縫いつけたりしたもの (図2)

③糸で鶴・蝶等の具象的な吉祥文様を刺繍したもの (図3)

④布で具象的な吉祥文様を伏せ縫いしたもの・押絵 (図4)

⑤方形の布裂を縫いつけたりしたもの (図5)

の5種類にわけられる。これまでに報告された背守りに関する文献によると、①は「背守り」、その他は「背紋」と分けて考えられている。(文献1) しかし、いずれにも長寿の祈願と魔除の意味が込められている。

背守りは、一般に背縫いのない産着や一つ身の着物の背に12針縫いあらわすものを示し、雄針 (--,-- --) で、左に折れたものが男児で、此針 (-·-·-·) で右に折れたものが女児用であると言われている。また、端は、女児は輪状に、男児は房状に結ぶとされている。しかし、既に報告された文献などから、必ずしもその通りではないことが分かっている。(文献1, 2/図1) おそらく、「背守り」あるいは「背紋」は子どもの健康長寿祈願を目的に、各家庭で受け継がれてきた習俗であるために、多様な形がみられるのだと思われる。

②の背紋には、菱型、麻の葉型、井桁型、星型などの幾何学的なバリエーションが多く見られる。これらの文様は単独で使われる場合と、背守り縫いの上部あるいは、下部に併用された場合とがある。(図1, 2)

③には、鶴、亀、蝶、蜻蛉、兎、海老などの動物文、撫子、菊といった植物文、花籠、扇といった調度文が見られる。花に蝶などの組み合わせもある。(図3・文献1)

④には、茄子、ザクロ、瓢箪、松などの植物文の他に、福助、お多福、雛などの吉祥を

意味する人物を伏せ縫したものも見られる。（図4）この技法による背紋は、明治40年頃小学校の手芸教育の中で盛んに取り上げられている。（文献1）

⑤の例として、四角の布の中央を絞って縫いつけ蝶の形を模したものもある。また、お守りの上部を縫いつけて背守りとする例もある。（図5）この技法は明治30年代頃にかなり流行していた。（文献1）

背守りあるいは背紋に使われた糸の色は、白、赤、赤と白、緑、黄、水色、青などあり、赤又は白の例が多いが、特に決まったものではなく、着物の色によって糸が使い分けられていることが分かる。（文献2）

沖縄における背守りの意味と役割

沖縄における服飾調査では実物資料が少なく、背守りの場合も例外ではない。そのために、これまでに報告された民俗調査や各市町村史から背守りに関する記述を抜き出し、それと新たな調査と実物資料を加え表2にまとめてみた。また、奄美諸島は琉球文化圏であり、沖縄の範疇ととらえ、表の中に加えてみた。

それによると、背守りは「ムンヌキ」「マブイウシー」「マブヤーウー」との名で呼ばれている。「ムンヌキ」は魔除け、またはお守りのことである。（文献26）「マブイ」または「マブヤー」は魂のことである。「ウー」は糸を意味する。しかし、特に呼び名のない地域も多く見られる。背に施された文様には、「魔物によって子どもの体に危険が及ばないように」というような魔除けの意味を持つ地域と「着物を通して体に魂を招き入れる」「魂（マブイ）を落とさないように」というように魂（マブイ）を守るという意味を持つ地域があることが分かる。

また、背守りを施す着物は、一般には、背縫いのない一つ身と言われている。民俗調査の報告を見てみると、背守りを縫いつけるのは、最初に身につける着物であることが分かる。表1で分かるように、子どもが誕生するとまず、ボロ布か古着で包み、地域によって若干異なるが名付の儀式（ナージキ）の頃に初めて、産着を身に付ける。おそらく、その産着は一つ身の着物であろう。しかし、実際に残ってる資料には、背縫いのある着物に施されている例もいくつかある。また、3～4歳頃までの着物に背守りがあったという報告も確認される。（文献46）これから考えると、特に一つ身の着物に背守りが施されていたとは限らない。

表3に示されるとおり、日本本土のように「背守り」と「背紋」といった分け方は、沖縄の場合にはみられない。むしろ、日本本土で「背紋」とされるものも、「背守り」として考えられているように思われる。

表3）沖縄・奄美における背守りの意味と形

地　域	背守りの名称	背守りの意味	背守りの形	背守りをつける時期	背守りをつける所	出典No.
大宜味村（喜如嘉）	ムンヌキ	ムンによって赤子の身体に危険を及ぼすことがないように	＊糸で×の印をつける ＊小さな布切れを縫い付ける	ナーチキ（6日）～1歳まで	ナーチキジンの背の衿首の下	文献9
東村（平良）			＊背縫いの所に一寸ほどの縫い込みを入れる		新しい着物の背縫いの所	文献11
名護市（久　志）	魂込め	着物を通して体内に魂を招き入れる	＊糸で×印をつける ＊房をつける	ナージキ（命名日）	ナージキジンの背縫いの上部	文献14
与那城村（宮　城）		ナブヤ（魂）を落とさないように	＊三角の布を縫いつける		クヌジヌ（子どもに着せる着物）の背縫いの表	文献19
読谷村（座喜味）	マブーイウシー	魔除けとして	＊赤布で印をつける ＊赤糸で印をつける		ウブジン（乳幼児服）	文献21
			＊赤糸で＊の印をつける			＊3
嘉手納町	マブヤーウー	魔除け	＊七色の糸で縫ぬう	ハチアッチー（初外出／一ヶ月）	ハチアッチーの晴れ着の背のところ	文献27
西原町	マブヤーウー	背守り	＊一辺2～3㎝の正三角形の赤布の周囲を縫いつけ、真ん中を糸で止める			文献29
浦添市		魂（マブイ）を守る。赤い色は魔除け	＊赤糸でへ型や井型を縫いつける ＊赤布紐		産着や幼児の着物	文献31
那覇市	マブヤーウー	悪霊から守る。魂をつなぎ、体から遊離するのを防ぐ	＊色糸を合わせて束ねその先端は房のように垂らす ＊矩形の赤布片をつける			文献59
			＊赤い糸で経てに三筋縫い上下から房を垂らす ＊赤い糸で経てに二筋縫い上下から房を垂らす		着物の背縫いの上方	文献57
			＊細いリボンや矢結びを縫いつける ＊桃の形を縫いつける			文献6

地　域	背守りの名称	背守りの意味	背守りの形	背守りをつける時期	背守りをつける所	出典No.
那覇市 （首　里）	マブヤーヲゥー	魔除けをつける	＊二寸四分の赤い三角の布を二つ折りにして、頂点を下に向けて縫いつける ＊赤糸や黄色で井型、へ型を縫う	3～4歳まで	着物の後衿下、背縫いの上方	文献46
			＊背縫いの部分に縫い込みを入れる。経に三筋糸目の跡あり		一つ身の着物の衿下、背中心部分（絣の着物）	＊3
			＊赤紫の糸で経にで三筋縫い、上下から房を垂らす		四つ身の着物の衿の付け根、背縫いの上方（紅型）	写真1
			＊赤い糸で経に三筋縫い、上下から房を垂らす。上下の房三束をそれぞれ一つにまとめる。		着物の背縫いの上方（紅型）	＊5
			＊白い糸で経に三筋縫い、上下から房を垂らす		着物の背縫いの上方（紅型）	＊6
			＊白糸で菱に縫う		着物の背縫いの上方（紅型一つ身）	写真5
仲里村 （比屋定）			＊ハベル（蝶）の形をかたどった布を縫いつける	マンサン（9日目）	ウブジン	文献32
糸満市	マブヤーヲゥー	背守り	＊布ぎれをつける ＊糸を垂らす		幼児の着物の背縫いの上の所	文献33
（喜屋武）		魔除けのため	＊別布を花形や蝶の形に切り縫いつける	ナージキ（命名日）	ナージキジンの後衿中心の表	文献14
知念村 （久　高）		魂が抜けないように	＊×印を糸で入れる	破れた着物や新しい着物をつける時	破れた着物や新しい着物の背中の方に	文献37
平良市 （狩　俣）		縁起が悪いので	＊背の上方に二寸程縫い込む		一つ身の場合	文献41
城辺町 （砂　川）			＊背の上方に二寸程縫い込む	ナーフィ（命名日）	一つ身のナーフィギンの背の上方	文献42
石垣市 （石　垣）		魔除けの意味	＊紐の付け根に菱型の文様を糸で縫った		紐の付け根	＊9

地　域	背守りの名称	背守りの意味	背守りの形	背守りをつける時期	背守りをつける所	出典No.
石垣市 （白　保）			＊⊕や菱の文様を赤い糸で縫った		背中や紐の付け根	＊8
（大　川）			＊紐の付け根に赤と白の菱型の文様を縫う		紐の付け根（昭和25年頃）	＊7
与那国町			＊男は白、女は赤で菱の形を縫った 男女で形が違っていた	2～3歳	背縫いのある子ども着の背中	＊10
	蝶の形をしているのでハビルと呼ぶ		＊四角の赤布裂を真中で絞って縫いつける	2歳まで	着物の背中	＊11
			＊赤い糸で下の方に房を垂らす ＊糸で菱型の文様を縫う	満1歳	一つ身の背中（房）と紐の付け根（菱）	写真2
			＊糸で菱型の文様を縫う	満1歳	一つ身の背中と紐の付け根	写真3 写真4
奄美 （字検村）			＊衿の下に白い糸で縫い取りしてある	イダシハジメ（7日目）	イダシギン（赤い着物）	文献47
		白髪になるまで長寿をして米飯を食べる人になれますように	＊経1寸5～6分緯1寸位の長方形の守袋を背紋にあたる所につける。 この中に白髪と米粒を入れる	生まれてから33日目（女子）、30日目（男子）の氏神に参詣する時		文献50
（中之島）	マブイ		＊赤布を付ける。その上に赤い糸で　形を続けて四つくくりそれらの四隅に色布でチンボイを9個つける。 マブイには七粒の米を縫い込む。 マブイの中央から下へL字型に糸を縫って行く。右は女子。左は男子		下着にもウブギンにも縫いつける	文献48 文献49

沖縄における背守りの形

沖縄における背に施された文様は、つぎのように分類される。

(1)は背縫いの部分に1寸～2寸ほど縫い込みを入れたものである。(図6)

(2)は糸で直線の糸目を見せるもの。これは、a 7針程縫い上下から房を垂らし、それが三筋あるもの(写真1，図7，図8，図9)と、b此針で12針縫い上部が右に折れ上下の先から糸が垂れているもの(写真2)の2通りある。

(3)は、糸で菱型・×型・へ型・井型などを縫いつけたものである。(写真3、写真4、図10、図11、図12、図13、図14、図15、図16、図17)

(4)は布片を縫いつけたものである。a三角の形を縫いつけたり(図18)、b四角の布の真ん中を絞って縫いつけたり(図19)、c米粒や白髪を入れた四角の布を縫込んだり(図20)、d細い布でリボンを作ったり矢結びをしたりして、それを縫いつけたりしたもの(図21)、e花型などを縫いつけたもの(図22)の例がある。

(5)は、米粒を入れた三角の布を縫いつけ、糸で方形を縫いその中にチンボイと呼ばれる布片を9個縫いつける。さらに中央部から下に向かって何針か縫い男子なら左へ、女子なら右へ折れるといったものである。(図23)

日本本土の背守りの実例と比較して見ると、今回調べた子どもの衣服の資料の中からは、(1)、(2)のa、(4)のa、d、(5)の例は日本本土には見当たらない。反対に(2)のbの形や(3)、(4)のb、c、eは、日本本土でも見られるものである。

形の上では、日本本土にみられる背守り、背紋に照らし合わせてみると、2の形は「背守り」に当たり、1、3、4、5は「背紋」と分類することができる。しかし、先に述べたように沖縄・奄美には「背守り」「背紋」と分ける考え方は見られず、両方を「マブヤーウー＝背守り」としてとらえており、形の上では「背守り」「背紋」と分類されるものも、意味の点では同じである。ここでは、意味に重点を置き、「背守り」「背紋」ともに「背守り」として考えたい。

糸で文様が施されたものを背守りと限定するのなら、(1)は、背守りとはみなされないが、魔除けまたは魂(マブイ)を守るという意味からすると、背守りの範疇として考えることが可能となる。このような例もここでは背守りとして加えたい。

(2)のaの形は、既に日本本土の他の地域には見られない沖縄独特の形であることが論証されている。(文献6)表3を見ると、この形の背守りは、首里・那覇地域にしか見られない。絵画(文献57／図9)に描かれた同形の背守りは、経縞あるいは格子縞の着物に縫いつけられているが、実物資料にみられる同形の背守りはほとんど紅型衣裳に施されたものである。子どもの着物に紅型を使う地域は、首里・那覇あたりに限られていた。この形が沖縄全域にみられないことから、次の二つのことが考察できる。

＊首里、那覇の士族階級以上にのみ伝承された形である。

＊広く沖縄全域にみられた形だが、伝統と格式を重んじる首里・那覇のみに、この形が

残った。

しかし、このあと詳細について、ここで論じるには調査不足で、この件については次の課題としたい。

(3)の形は、日本本土でもよく見られるもので、たくさんのバリエーションがあるが、沖縄も同様で、背だけでなく、紐の付け根の部分にも見られ（写真4）、それも魔除けの意味があったと言われている。

(4)のａの三角の布を縫いつけるのは、沖縄・奄美以外の地域では探すことができなかった。三角の布はハベル（蝶）と呼ばれる。蝶は魂（マブイ）の化身であり、聖なるものと考えられている。また、三角の布を集めて衣服にした例もある。三角の布の中には米粒を入れて縫い込む場合がある。（文献58）

(4)のｂは例としては少ないが、布の真ん中を絞って縫いつけ、沖縄では「ハベル（蝶）」と呼ばれている。

(4)のｃは奄美地方に見られる背守りで、袋の中には牛の角、大豆、ヒエ、モミなど7種類のものを入れたり、また長寿者の白髪や米粒を入れたりする。方形の布の下、着物の背中心部分には糸で（↑）文が施されている。（文献58）

ｅの例としては少なく、桃の型（那覇）、花型や蝶型（糸満）を縫いつけたものがある。

(5)は奄美地方のみに見られる形である。産着の下着（ナヅケキモン）や上着（ウブギン・オブギン）の両方に縫いつけられている。（文献57）

背守りの変遷について

明治以降、裁縫技術が広く展開するには、学校教育と大きな関わりがある。

明治5年に学校教育が始まり、小学校から「裁縫」の時間が設けられ、裁縫の技術指導が行われるようになる。それとともに背守りの形と意味も大きく変わってきたと言える。

夫馬佳代子「産着に見られる背守りの変遷」（文献1）によると、明治10年から大正15年までの学校教育で用いられた裁縫の教科書をランダムに選び出した38冊の内、「背守り」、「背紋」の形と意味について記載されているものは12冊である。検定の行われた教科書11冊の内8冊には「背守り」「背紋」について記載されていない。

また、学校教育で使われたものではないが、明治42年の裁縫書『裁縫おさいくもの』には「背紋」を「背守り縫い」と表現するものもみられる。（文献1）

時代を追って裁縫教育における教科書をみると、「背守り」「背紋」が装飾化され、裁縫の技術修練のために使われるようになり、「背守り」「背紋」の習俗としての意味付けが曖昧になっていくことが分かる。（文献1）沖縄奄美において、背守りと背紋の意味が曖昧に

とらえられた背景にはこのように学校も含めた手芸教育によるところが大きい。

さらに、裁縫書は、日本各地に伝わる背紋の形を集め装飾化することで、逆に各地に伝わる背守り・背紋の形に大きな影響を与えている。(文献1)

このように、学校における裁縫教育は、日本の背守り・背紋の意味と形を大きく変える要因の一つと考えられる。

沖縄においても例外ではなく、今回の聞き取り調査でも、学校の授業で裁縫を指導されたとの回答を得ている。

おそらく、沖縄・奄美でも日本各地でも見られる背守りの(2)のb、(3)、(4)の形は、昔から伝承されてきた形ではなく、学校または手芸教育の影響によるものと思われる。

沖縄における廃藩置県は明治12年、学校教育は明治13年から開始される。このようにして、上述の形は、沖縄各地に広まっていったのではないかと思われる。

反対に、(1)、(2)のa、c、(5)の形の背守りは、沖縄・奄美のみに見られる独特のもので、伝承されてきた形だと考えることができる。

(2)のaの背守りは、背守りの形の中で(2)のb(写真2)または日本本土の①(図1)の背守りに最も類似性がある。(2)のbまたは図1は、日本本土で「背守り」と称されるものである。その形はかなり多様なバリエーションがある。『若草頌』(文献2)中には、左右に折れの無いものもあり、背守り(2)のaとどのような関わりがあるか興味深いものがあり、次の3つの可能性が考えられる。

＊背守り(2)のbの形から影響を受けて、背守り(2)のaの形が生まれた。

＊背守り(2)のaの形が日本本土でbの形へ変わり、沖縄で(2)のaの形で残った。

＊両方に近い形が元となり、日本、沖縄それぞれで、(2)のbあるいは(2)のaに変わった。

しかし、沖縄における背守りの事例が少なく、それを裏付ける文献資料などもほとんどないため、背守り(2)の形とどのような関わりがあるのか実証することは今の段階ではむずかしく、今後の調査の課題としたい。

おわりに

本稿は、沖縄の産育における子どもの衣との関わりを、各市町村史などの報告から考えるとともに、「背守り」について、これまで報告された民俗調査、文献に新たな調査と実物資料を加えて、日本本土と比較しつつ、その意味と役割、形とその変遷について考察してきた。

沖縄において「ムンヌキ」「マブイウシー」「マブヤーウー」と呼ばる背に施された文様は、日本本土においては「背守り」「背紋」に分類され、いずれも長寿や魔除けを祈願し

て施されるものである。沖縄においては形の上で、このように分類することは可能であるが、両方とも魔除けや魂を守る意味を持つため、特に分けられず一括して「背守り」と考えることができる。

その形は、様々なバリエーションを持っているが、本稿では、日本本土との共通形や、沖縄独自の形の資料を報告、考察を加えた。本土同形の背守りは、学校教育などの影響を受けて沖縄に入ったと考えられる。(2)のａ形は、日本本土に見られない沖縄独自の形であるが、首里・那覇地域にしか見られない形であり、これがどの様な経緯によってこの地域に存在したのか、その辺りを考察するのは今後の課題である。また、この(2)のａ形の「背守り」は(2)のｂ形の日本本土で「背守り」と称されるものに最も類似性が高く、このことからａとｂとの間には何らかの関係があるのではないかと考えられる。これもまた今後の調査、研究の課題としたい。

今回の「背守り」についての聞き取り調査においては、明確な答えをほとんど得られず表に報告したものは、回答を得られた数少ない例であった。

明治・大正・昭和と医療事情が改善されるにしたがって、乳幼児の死亡率が低下したこと、また学校教育（特に裁縫教育）の普及などによって、「背守り」はその意味と形を変化させ、また衰退させていったのではないかと思われた。

最後となったが、色々ご教授、ご協力いただいた皆様に謝意を表して終わりとしたい。

脚注

（＊1） 柳悦州・片岡淳／ラオスの染織調査／1993年12月

（＊2） 北谷では大正5、6年頃には小学校4年生から裁縫の教科で赤子から幼児10歳前後の子ども用の衣類の縫い方を教わる

（＊3） 実物資料。尚裕氏所蔵（『尚家所蔵琉球王朝文化遺産展』1993年より）

（＊4） 実物資料。読谷村歴史民俗資料館蔵

（＊5） 実物資料。個人蔵（『琉球文化遺宝展図録』）

（＊6） 実物資料。個人蔵

（＊7） 実物資料。南嶋民俗資料館蔵

（＊8） 多宇時氏（明治40年生／85歳）より聞き取り

（＊9） 大浜真鶴氏（明治36年生／90歳）より聞き取り

（＊10） 徳吉マサ氏（大正9年生／72歳）より聞き取り

（＊11） 池間苗氏（大正8年生／73歳）より聞き取り

図1（文献1、2、3より作図）

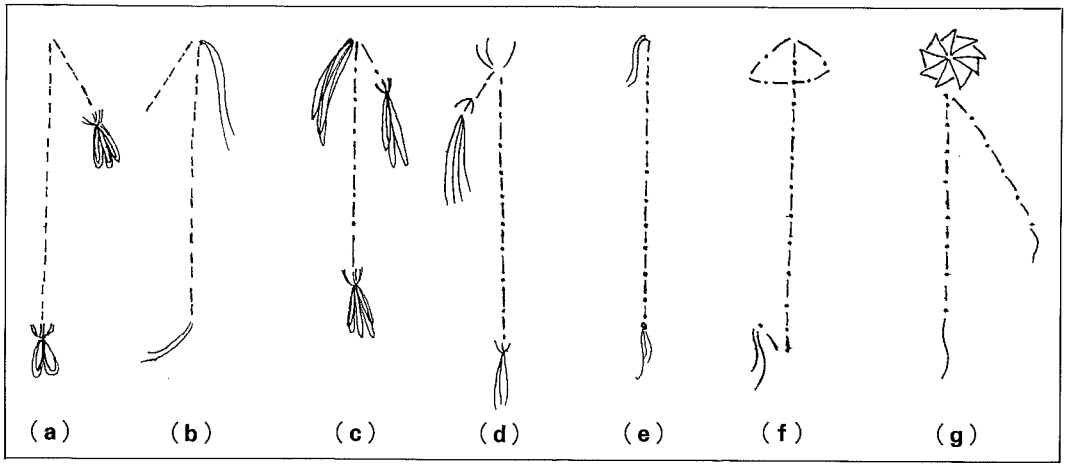

図2（文献1、3より作図）

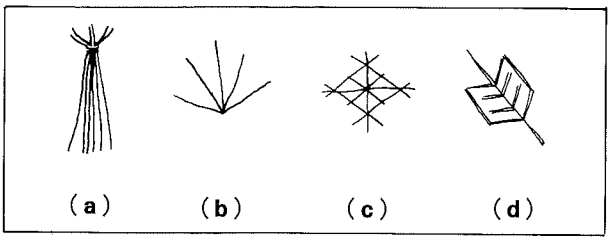

図3（文献1、3より作図）

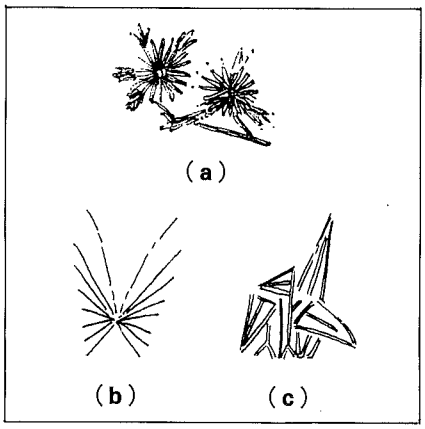

図4（文献3より作図）

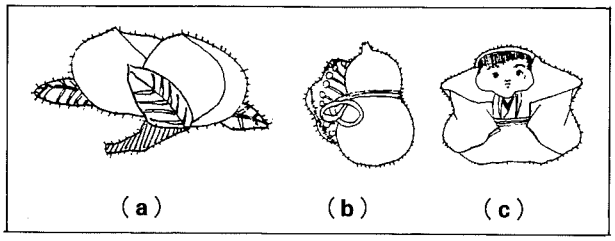

図5（文献2、3より作図）

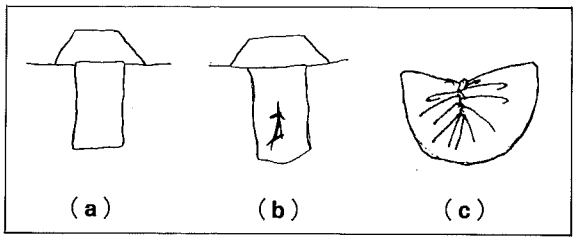

図6
（＊4より作図）

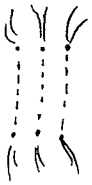

図7
（＊6より作図）

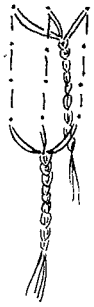

図8
（＊5より作図）

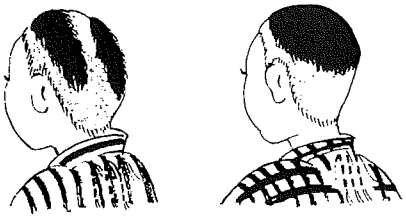

図9
（文献27より作図）

図10
（＊3より作図）

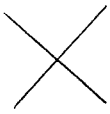

図11
（文献9より作図）

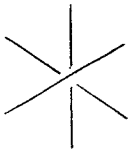

図12

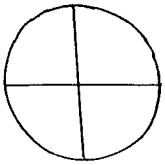

図13
（＊8より作図）

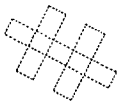

図14
（＊10より作図）

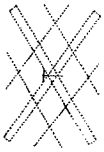

図15
（＊10より作図）

図16
（文献6より作図）

図17
（文献6より作図）

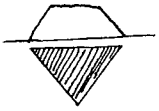

図18
（文献46より作図）

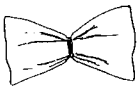

図19
（＊11より作図）

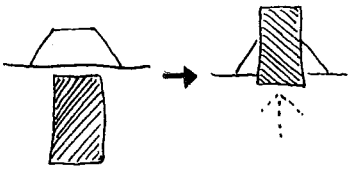

図20
（文献58より作図）

図21
（文献6より作図）

図22
（文献6より作図）

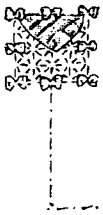

図23（文献58より作図）

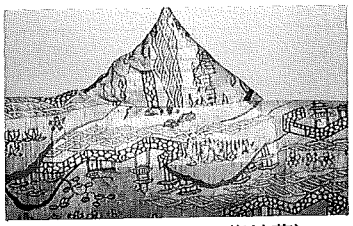

写真5（日本民藝館蔵）

参考文献一覧

1 夫馬佳代子「産着にみられる背守りの変遷～裁縫教科書を基礎資料として～」『研究紀要　創刊号』1991年　衣の民俗館

2 切畑健「『若草頌』によせて」『田村コレクション　若草頌　子どもの衣裳』1993年　田村資料館

3 『祈り・忌み・祝い～加賀・能登の人生儀礼～』1993年　石川県立博物館

4 『近江商人の妻たち』1993年　滋賀県立琵琶湖文化館

5 辻合喜代太郎／橋本千榮子『琉球服装の研究』1991年　関西衣生活研究会

6 嘉陽妙子「マブヤーウーについての一考察」『沖縄民俗研究　第6号』1986年　沖縄民俗研究会

7 「奥部落調査報告書」『沖縄民俗　第九号』1965年　琉球大学民俗研究クラブ

8 「与那部落調査報告書」『沖縄民俗　第17号』1969年　琉球大学民俗研究クラブ

9 平良次子「通過儀礼における衣服～大宜味村喜如嘉の場合」『沖縄民俗研究　第8号』1988年　沖縄民俗学会

10 「川田部落調査報告書（東村）」『沖縄民俗　第7号』1963年　琉球大学民俗研究クラブ

11 「東村平良区採訪報告」『沖縄民俗　第6号』1963年　琉球大学民俗研究クラブ

12 『今帰仁村史』昭和50年　今帰仁村役場

13 「上本部村具志堅部落調査報告」『沖縄民俗　第15号』1968年　琉球大学民俗研究クラブ

14 「久志村汀間部落調査」『沖縄民俗　第13号』1967年　琉球大学民俗研究クラブ

15 「伊是名部落調査報告」『沖縄民俗　第八号』1963年　琉球大学民俗研究クラブ

16 「田名部落調査報告」『沖縄民俗　第四号』1961年　琉球大学民俗研究クラブ

17 『石川市史』昭和51年　石川市役所

18 「勝連村南風原調査報告」『沖縄民俗　第18号』1970年　琉球大学民俗研究クラブ

19 「宮城部落調査報告」『沖縄民俗　第17号』1969年　琉球大学民俗研究クラブ

20 『具志川市史　第1巻　新聞集成（明治編）』平成3年　具志川市役所

21 「座喜味部落調査報告」『沖縄民俗　第11号』1966年　琉球大学民俗研究クラブ

22 村山友江「読谷村儀間部落の産育について」『読谷村立歴史民俗資料館紀要　第8号』1984年　読谷村教育委員会歴史民俗資料館

23 村山友江「読谷村喜名部落の産育について」『読谷村立歴史民俗資料館紀要　第11号』1987年　読谷村教育委員会歴史民俗資料館

24 村山友江「読谷村楚辺部落の産育について」『読谷村立歴史民俗資料館紀要　第12号』1988年　読谷村教育委員会歴史民俗資料館

25 知花春美「読谷村字楚辺部落の衣」『読谷村立歴史民俗資料館紀要　第13号』1989年　読谷村教育委員会歴史民俗資料館

26 村山友江「読谷村字長浜部落の産育」『読谷村立歴史民俗資料館紀要　第16号』1992年　読谷村教育委員会

歴史民俗資料館
27 『嘉手納町史　資料編２　民俗資料』平成２年　嘉手納町役場
28 「中城村伊集」『沖縄民俗　第23号』1977年　琉球大学民俗研究クラブ
29 『西原町史　第四巻　資料編三　西原の民俗』平成元年　西原町役場
30 「西原町棚原報告」『沖縄民俗　第22号』1976年　琉球大学民俗研究クラブ
31 『浦添市史　浦添の民俗　第四巻　資料編３』1983年　浦添市
32 「比屋定部落調査報告」『沖縄民俗　第14号』1967年　琉球大学民俗研究クラブ
33 平敷令治「衣・食・住」『沖縄県文化財調査報告書　糸満の民俗　糸満漁業民俗資料緊急調査』昭和49年　沖縄県教育委員会
34 『東風平村史』昭和51年　東風平村役場
35 「糸数部落調査報告」『沖縄民俗　第14号』1967年　琉球大学民俗研究クラブ
36 「久手堅部落調査報告」『沖縄民俗　第七号』1963年　琉球大学民俗研究クラブ
37 「久高島」『民俗　創刊号』1960年　琉球大学民俗研究クラブ
38 「(三)　信仰と民俗」『南風原村史』1971年　南風原村役場
39 比嘉伝福「座間味の民俗調査から」『民俗　第２号』1960年　琉球大学民俗研究クラブ
40 「粟国村西部落調査報告」『沖縄民俗　第15号』1968年　琉球大学民俗研究クラブ
41 「狩俣部落調査報告」『沖縄民俗　第12号』1966年　琉球大学民俗研究クラブ
42 「城辺町砂川部落調査報告」『沖縄民俗　第18号』1970年　琉球大学民俗研究クラブ
43 「女性の生活とその変化な－既婚女性を中心に－」『文化人類学実習報告書　第８輯』1990年　国際基督教大学社会学科人類学研究室
44 宮城文『八重山生活誌』昭和47年
45 「租納部落調査報告」『沖縄民俗　第16号』1969年　琉球大学民俗研究クラブ
46 平敷令治『沖縄・奄美の衣と食』昭和49年　㈱明玄書房
47 有馬英子「女の一生聞書－奄美大島宇検村生勝－」『南島研究～女性特集～　第13号』1972年　南島研究会
48 栄喜久元「衣食住」『トカラ列島有形民俗資料調査報告書』昭和46年　鹿児島県明治百年記念館建設調査室
49 村田　熙「信仰・行事」『トカラ列島有形民俗資料調査報告書』昭和46年　鹿児島県明治百年記念館建設調査室
50 長田須磨「奄美の女性の生活と習俗」『奄美郷土研究会報　第12号』昭和46年　奄美郷土研究会
51 『中国諸民族服飾図鑑』1991年　柏書房㈱
52 朴京子／尹良老／趙鮮姫／金容文／朴順姫「韓国の通過儀礼服～出生から臨終まで～」『国際服飾学会誌№10』1993年　国際服飾学会
53 『原色染織大辞典』昭52年　㈱淡紅社
54 『民間信仰辞典』昭55年　東京堂出版

55　『民俗の事典』1972年　岩崎美術社

56　『沖縄語辞典』昭38年　大蔵省印刷局

57　宝玲叢刊　第五集「琉琉風俗絵図」昭57年　本邦書籍㈱

58　黎明館企画特別展「子どもの世界」図録1990年　鹿児島県歴史資料センター黎明館

59　『那覇市史　那覇の民俗』昭54年　那覇市

60　『佐敷町史　二　民俗』昭59年　佐敷町役場

61　『北谷町史』平成4年　北谷町役場

62　『渡名喜村史　下巻』昭58年　渡名喜村